

弟だけ

伊藤 優津奈

私には四年生の弟がいる。

名前は「げんき」。

私はげんちゃんにイライラしている。

お母さんは私とげんちゃんがいるのにいつも、

「ゆづ、カーテン閉めて。」

「おばあちゃんの家に行つて来て。」

などと、私だけに用事を言いつける。

げんちゃんは野球を習っているので、

家族の話題も生活も野球中心。

もちろん私も弟の野球を応援している。

でも私の話はしてくれないのと思つてしまう。

冷蔵庫で発見したゼリー。

「食べていい。」

と聞くと、

「げんちゃんのお弁当に入れるから、ゆづの

はまた買つてくるね。」

だつて。

そんなにげんちゃんのお弁当が大事ななの。

私はイライラがどんどんたまってきた。

また手伝いをたのまれた時、

「何でやつてくれないの。私ばかり手伝つ

てる。」

と、げんちゃんにいきなりをぶつけた。

言い合いになつてもつとイライラした。

次に手伝いをたのまれた時は、

げんちゃんにもやらせるようにしよう。

仕事がサツとできて、考えて動けるかつこい

い四年生になつてほしいし。

きつと弟の信らい度が増すはず。

そうか。

私が弟よりも手伝いをたのまれるのは、

信らいされているからかもしれない。

私ならたのんでも大じょうぶつて思われているのかな。

そう思つたら、少し心が軽くなつて、

げんちゃんに強く言つたことが申し訳なく思

えた。

「げんちゃん、強い言い方してごめん。」

「ぼくも言うこと聞かなくてごめん。」

二人で話し合つてルールを作つた。

手伝いは二人で協力してすること。

私は本当は手伝うことがいやじゃない。

家族のためにがんばつてくれていてお父さん

やお母さんの力になりたい。

弟だけずるいつていう思いが強くなつただけ。

「お父さんとお母さんとお姉ちゃんとおばあ

ちゃん。家族がぼくは一番好きだよ。」

そう言つてくれるげんちゃん。

それから、

「もう四年生だからちゃんと手伝う。あまえ

ていたらはずかしい。」

だつて。

感動した。

こんなにちゃんと考えてくれていて、

かつこいい四年生は、

きつと私の弟だけ。